

幕末維新期における尾張藩の「勤王誘引」活動

上野 恵

慶応四年（一八六八）、朝廷側に与した有力な藩が、朝廷の命を受けて、周辺の諸藩や領主などに対して、朝廷への忠誠を求めた行為を、勤王誘引という。

尾張藩は、慶応四年正月に佐幕派であった家老らを朝命によって斬首して以降、藩論を勤王に統一させ、勤王誘引活動を行っている。

この勤王誘引に関して、具体的に研究をしている論文はほとんどない。徳川林政史研究所所蔵の「勤王誘引書類」（現在史料整理中）や「徳川義宜家記」などの史料を用いて、活動の実態を明らかにして、勤王誘引の具体像を見ていきたい。さらに、御三家でありながら勤王の立場を主張した尾張藩の動向を追い、勤王誘引活動を通じての幕末維新期における尾張藩の位置付けを考えたい。

尾張藩に連動して、尾張藩に付随している諸藩が自身の立場を主張するような面がみられる。尾張藩の周旋を受けた諸藩の動向にも注目して、勤王誘引活動が、当時の諸藩にとってどのような意味があったのかを明らかにしていきたい。

（平成18・12・5）

待定法師の研究

宮本花恵

待定房禪峯待定（一六八五～一七三二）は、享保十六年（一七三二）七月十七日、羽州置賜郡永居郷の亀岡文殊堂（現、山形県東置賜郡高島町亀岡）において生身入定した。このとき三千人の善男善女が群参したという。

待定は近世捨世派の僧侶とされている。しかし待定は、曹洞宗宝勝禅寺（現、山形県山形市七日町）の瑞峯和尚を師として出家しているのであり、その行実には山岳信仰の特徴が見られる。念仏を第一義とはするが、遊行の木食僧の性格も持っているわけで、明らかに捨世派僧としては異色であり、もちろん曹洞禅からも離れている。その行実を垣間見ただけでも、待定は単に捨世派僧という枠組みでは捉えきれない存在であったことに気づく。

さいわい待定の行実を記した『待定法師忍行念仏伝』（上下二冊、元文元年刊）が伝えられている。待定の入定後に相馬領（現、福島県福島市）の人々の浄財によって刊行されたものである。卒業論文では、いまだ活字本のなかった『念仏伝』を翻刻化するという基礎的な研究に終始した。今後は『念仏伝』を読み解きながら待定の行実を再確認し、個々に生ずる諸問題について丁寧に考察してゆきたい。

（平成18・12・5）